

Title	五来欣造著 社会革命の将来
Sub Title	
Author	田中, 萃一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.4 (1921. 4) ,p.585(157)- 586(158)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210401-0157

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

法王の公證人によつて起草された英語の文書に之が見出される。ボロニヤ式の日讀の法は第十五世紀に至つて歐大陸に復活せられたが、それ以前には概して廢れかゝつてゐた。

△四季 世俗的に一年を分つて四季とする。その各の中央を二分(即ち春分と秋分)と二至(即ち冬至と夏至)に定めてある。四季の始まる日は種々に定められてゐる。嚴密に言へば勿論是等は及ぶ限り分至間の中央に近い處に置かるべきである。それ故英の *Book* 大師はその始をば春を二月七日、夏を五月九日、秋を八月七日、冬を十一月七日、換言すれば何れも月の *Ides* の七日目に置いた。併し彼は又 *Seville* の *Isidore* が其の始をば之よりも二週間餘りも遅らせ、二月二十二日、五月二十四日、八月二十三日、十一月二十三日とした事に氣づいてゐた。(註) 中世の曆に於ては兩者の日附が往々記されてゐた

が、遂に *Isidore* 式が一般に行はれた。但しその日附の二つは一日丈け動かされてゐる。即ち少なくとも中世の末期に於ては、四季は本堂に於ける *St. Peter* 祭日(二月二十二日) *St. Urban* 祭日(五月二十五日) *St. Bartholomew* 祭日(八月二十四日)及び *St. Clement* 祭日(十一月二十三日)に始まるものと見做されてゐた。(註) "De Temporum Ratione," xxxiii.

新刊紹介

五來欣造著 「社會革命の將來」

富山房發行 定價金 貳圓

世界大戰の副産物たる露獨革命の由來を明にし延て社會革命の將來を説いたもので大體に於てこの書は曾て自分が本紙上で紹介した德富蘇峯氏の著書と同性質のものである。但し蘇峯氏の著書の文學上の作品として殊に價值あるに對しこの書は社會改造の原理としてレオン・ブルジョア、デュギューイ、ジイド諸氏の著書に基いてソリダリテ・ソシアルの主義を且つ紹介し且つ推奨する處に特長がある。自分も曾て世論が餘りに社會主義過激思想に傾けるを慨しソリダリテの思想を鼓吹したこともあるので佛國通として推さるる五來法學士のこの書に對しては實に知己に邂逅せるが如くに感ずるのである。勿論自分は現代思想の缺陷を補はんが爲にソリダ

リテの思想を主張するもので敢て徹頭徹尾ブルジョア氏の意見に賛成するものには無い、抑もソリダリテの思想の初めて我國に紹介せられたのはドモウラン氏の著者に依れるので氏は之を排斥して居るのである、而して氏の著書は義塾の譯本を以て初めて日本の讀書界に普及されたのである。併し目下の過激思想の對症策としてはソリダリテの思想に及ぶものは無いのでこの思想を簡明に論述してある本書は最も時機に適した出版物と云ふ可きである。附録の『平和會議見やげ』も亦面白い讀物である。蓋し五來法學士が目下政治問題社會問題を評論する學者のうちにあつて詞藻富麗なる點に於て一頭地を抜いて居ることに就ては世間に自ら定評があるのである。

書評の體裁上最後に一二の事實の誤謬と思はるるものを指摘して置く。一八五頁に獨逸の社會民主黨獨立派が一九一八年九月シャイデマン氏等の入閣以後獨立の一黨を組織するに至つたやうに記してあるが、抑もハーゼ等の一派は一

九一六年の三月に既に社會民主労働團を組織し翌年四月スバルタクス派等と合同して獨立社會民主黨を組織したのである、随て一八八頁にリープクネヒトがスバルタクス團を組織したとあるのも正しくは再興したとある可きである。又二四五頁にブルジョア自ら労働省を創設したとあれど労働省は一九〇六年にクレマンソーが始めて内閣を組織した際に創設したのである。(田中萃一郎)

増補改版労働問題の

現在及び将来

四六版三九四頁
定價金三圓二拾錢
大 鏡 閣 出 版

此の書は曾つて吾人が本誌上に於て紹介せる大正八年十一月刊行「労働問題の現在及び将来」を増補改訂し、前版の文章體を口語體に改め、附録「サボタージ」論を第四章中に編入し、新たに第十、第十一の兩章を設け、從來の五號活字をブルデュワ活字に組替へて新たに上梓せるも

のなり。追加兩章は「利益分配制度」並びに「經營權分配制度」に關する簡明なる論述なり。著者は労働問題が一時的なる社會の動搖に由りて消長す可き性質のものに非ざるを信ずると共に、斯問題の内容は時勢の推移に伴れて、常に變動せざる可らざるを想ひ、爰に舊版の全部に亘りて嚴密なる改訂を施せるものなり。自家の著書をして常に時代の進展に遅るゝことなからしめんことを努めて倦まざるものは堀江博士なり、而して博士に就きて、其の労働問題に關する最新最良の知識を受けんとする讀者は須らく舊版を抛つて此の改訂版を手にせざる可らず。(但し、吾人が本版に於て遺憾とする所のものは改訂新版が却つて舊版に比して著しく多大なる誤植を有すること是れなり。一頁に就きて數ヶ所の誤謬を發見し得可き箇所少しとせず、次版に於て更らに嚴密なる校正を希望して止まざるなり)。

労働問題を解決するに當り、労働者の自治と國家の施設とを併行せしむるを必要」となし、「労働者が其の自治的能力に依つて、自己の利益を防御し、又た之れを發揚するは、労働問題解決上に於て、重要な關係を有するものにして、而して此の自治的能力を實現する團體の労働組合に外ならざる以上、國家は労働組合の成立、成立後の運動、將來に於ける維持等に就きて、總べて、其の障礙と爲るものを除き、便宜と爲る可きものを與ふるの方針に出でざる可らず」と做すなり。洵に博士の所論は穩健、老實、着實、眞摯にして、些も過激、急進、燥暴、浮薄の分子を發見すること能はず。

然れども密かに、案するに労働問題の解決は労働者の自治と國家の施設との併行に由りて之れを期待すること能はず。解決は併行線が融合一致して一線と爲れる時に於て之れを見出し得可し。問題は廣義に於ける労働者の自治體が即ち國家たるに至れるの時、初めて之れを解決し得可きものには非ざるか。凡ゆる階級的分岐

而も労働問題の根本に就きて、博士の抱懷せる意見は毫も變することなし。即ち博士は「勞

は消滅し去つて、物質財及び勤務給付の提供者なる人類と、其の享有者、使用者及び消費者としての人類とが同一體と爲れるの時、問題は眞個の解決を見る。博士の理想郷も亦た恐らくは此處に存するなる可し。されど博士は是に至つて黙せり。博士は理想を歌ふ詩人に非ずして現實當面の問題に即する活學者なり。而して博士が、曩日の空想は必ずしも今日の空想に非ず、時勢の急變、驚嘆に値するものありと稱して其の辛辣なる筆を擱けるの處に長閑なる詩人の歌は發するなり。ウイリアム・モリス其の

The Day is Coming. に於て歌つて曰く、
O strange new wonderful justice! But for whom shall we gather the gain?
For ourselves and for each of our fellows, and no hand shall labour in vain.
Then all mine and all thine shall be ours, and no more shall any man crave
For riches that serve for nothing but to fetter a friend for a slave.